

オンライン読書会に初心者が涙目で飛び込んだら見える景色が変わった話

新型コロナウイルスの影響で自宅待機を余儀なくされていた4～5月。こうも家にこもっていると、人と喋りたくなる。オンラインイベントが増えていくなか、読書会にもその取り組みが目立つようになっていた。

本が好きな私は、以前からその存在に惹かれていた。しかし、なかなか参加の一步を踏み出せずにいた。読書会への参加は、本の知識がない私にはふさわしくないと、勝手に思い込んでいたからだ。

でも画面越しならいけるのではないか……人と会わないことで生まれたさみしさが勇気変わったそのとき、私は半ば勢いだけで参加を決めていた。そして新しい景色を知ることになる。

「彗星読書倶楽部」を選んだ理由

今回参加したのは、zoom というオンラインアプリを使用して行う、彗星読書倶楽部さんの読書会。江戸川乱歩の短編推理小説「D 坂の殺人事件」を事前に読んで参加する課題型。時間は2時間。参加費は1000円。

『D 坂の殺人事件（江戸川乱歩）』

ある9月の蒸し暑い晩、「私」と探偵の明智小五郎は、D 坂にある喫茶店の向かいの古本屋で、店の女房の絞殺死体を発見する。犯行時に古本屋から逃亡した者はなく、犯人を目撃した学生の証言は曖昧で、警察の捜査は難航する。明智小五郎が解き明かした驚くべき真相とは？

私が彗星読書倶楽部さんを選んだ理由は大きくふたつ。

一つ目は、本の知識が不要なこと。

気軽に参加できそうな読書会はたくさんあるが、彗星読書倶楽部さんは「全く知識がない状態で読んだときの発見を重視する」と、知識がなくても良い理由が明確に説明されていた。話すのが苦手な人は聞くだけでも良い、読み切れなくても心配いらぬ、といった言葉も響いた。

二つ目は主催者がどんな人かわかること。ホームページによると、主催者の森大那(もりだいな)さんは20代男性。小説家、読書会プロデューサー。早稲田大学で文学や芸術を専門的に学んでいたそうで、本についての専門知識が豊富なことがうかがえる。また、過去にどんな内容の会を開催したかも知ることができたので、自分に合うのかどうかとても参考になった。

オンラインアプリを使用することについては、慣れていないので不安はあったが、事前に使用方法がメールで送られてきたし、会場に足を運ばないだけでも心理的ハードルはかなり下がる。

会話は成立するのか……不安と緊張

今回の参加者は主催を入れた6人、少人数制のためこれで満席だ。女性が4人。男性が2人。年齢も皆バラバラだった。

軽く自己紹介をする。私だけが読書会は全くの未経験であるということが判明し、ここで少し怖気づく。

「課題図書は読み切れましたか?」「こういった分野の本は読みますか?」と森さん。課題である書籍、ジャンルをどのくらい読み込んでいるか、これが司会をする側にとって大事なデータになるそう。ちなみに私は推理小説は読まない。江戸川乱歩の作品も初めてで、前日に一度読んだきり。

次に会の進め方について。森さんがこれからある質問をし、話が広がればそのまま流れで盛り上がってもいいし、そうでなければ順々にストーリーを追って、その都度好きな話題で話してもらおうというもの。

ある質問とは、きっと難しいものに違いない。画面に映る私はなにごともないかのような顔をしていたが、内心穏やかではなかった。

「物語に入るこの段階で、コメントしておきたいことはないですか」
質問はいたってシンプルなものだった。しかしまだ油断はできない、ほかの参加者の出方をうかがう。

「物語に出てくる間取りを想像するのが難しい」とひとりの声。確かに、大正時代に発表された作品ということもあり、文章だけでは当時の生活空間は想像しづらい。

「では、そこも含めて皆さんと話しながら読み進めていければと思います」
いよいよ中身に入っていく。

「こういう古本屋の描写を、はっきりイメージできた方はいますか」
物語に出てくる建物や場所をイメージできたか、またそれはどのようなものか、森さんが質問しながら進めていく。想像していたような難しい問いが出てくることはなく、

しかしそれをきっかけにそれぞれの記憶やイメージが言葉になると、こうも人によって違うのか、と楽しい。

「こういう障子を見たことがありますか」

話のキーポイントとなるのは障子の形状なのだが、私は実際に見たことがなく、ネットで調べてみたものの、どうもこれといった答えがない。

「実はわからず、読み進めるうえで引っかかっていたのでどういものか知りたいです……」

ここではじめて発言をした。ほかの参加者からも同じ声。実際に見たことのある人が、障子わからない問題を解決へと導いてくれたのだが、私は耳を傾けながらも、「言葉を声に出して伝えること、共感されることはこんなにも嬉しいのか！」と余韻に浸っていた。自分の中だけで終わっていた本の世界を誰かに伝えることができる喜び。そして気づき始めていた。情報や知識の交換だけが読書会で得るものではないのだ。

それにしても森さんの司会がうまい。こちらに話題を振りつつ、豊富な知識でさらっと補足してくれる。返しもなんてスムーズなんだろう。主催者によってもそれぞれの色があり、得るものや発見は違ってくるのだろう。

気づけば惹かれていく

あっという間に1時間が経過し、ここで5分間の休憩。カメラを切ったり、飲み物を飲んだり各々一息つく。なぜこの本に惹かれたか、と参加者同士で話に花が咲いていたのも良かった。当たり前だがひとつの本に惹かれ、それを手に取る瞬間は皆それぞれ違うのだ。しかし今、ここでこうして同じ本の話をしているという巡り合わせ。感慨深かった。

再開し、物語はクライマックスへと進む。

「この推理に説得力があった方はいらっしゃいますか。」

探偵推理小説ならではの、犯人や、それを暴いた推理についても深く切り込んで行く。読後なにを感じたか、なぜそのような感情を持ったか、登場人物、作者、完結したひとつの作品を再度いろんな角度から見えていく。推理小説は普段あまり読まないと言っていたが、この頃には作品に愛着が沸き、乱歩の書いたほかの作品も今すぐ読みたくなってくる。

「この作品が何年に発表されたかご存知の方はいらっしゃいますか。」

作品が生まれた時代背景から読み取れること、なぜこの本を課題にしたのか、専門知識を学んできた森さんだからこそその捉え方がとても面白く、ため息が出たが、ここは参加した人だけの特権にしておく。最後に、知識があるとまた違った楽しみ方が生まれる、ということを見せてくれた気もする。

ゼロの状態を読むからこそ見えること

興奮冷めやらぬ私は、主催の森さんにぜひ話を聞きたい！ と後日取材を申し込んだ。知識がない状態で参加するという、また今後増えていくであろうオンラインイベントについてもお話を伺った。

——読書会を始めたきっかけを教えてください！

大学で所属していたのが小説家の堀江敏幸さんのゼミで、学生が書いた文章や堀江さんが指定した本を読んできて皆で語り合う、というのをずっと繰り返してきました。それが大学時代で一番楽しい時間だったなと思っていて。ゼミ生もみんな同じ思いを抱いていたので、長い休みがあると一日かけて読書会をやろうよ、って集まったり。

こんなに楽しい場所を自分たちで一回作っているから、また作れる、と思ったのが彗星読書倶楽部を始めた最初のきっかけです。

——彗星読書倶楽部さんの特徴として「事前知識が必要ない」というのが参加の決め手になりました。

本の中でも事前知識が必要な本と、なくても読める本の2つに分けられる、というのが私の本の捉え方なんですよね。

事前知識が必要ない本を使えば、共通項をプライベートで持たない人たちが集まっても絶対に会話が成立する、と思って。それをどう成立させて、どうその場でクオリティを上げていくかは司会の能力にかかっている。それに関しては自信があったので知識はいらないですよ、とアピールしましたね。

——実際に知識がほとんどない私でも充分楽しめました！

文学作品ていうのは、先入観を持たないとか、これが定説なんだとか知らないほうが、一つのすごく良い体験になって残ることが多いんですよ。ビックネームの作品だとWikipediaとかアマゾンレビューとか、こういう風にかかれていてという定説がもうあるんですけど、やっぱりちょっとそれは違うよね、とか、自分が注目したのは別のポイントなんだよな、ていうのが頭をまっさらにするとくっきり見えるんですよね。そういう体験をしてほしいという思いが非常に強いです。

——主催者の方によって、読書会の方向性はかなり違ってきますよね。

結構違うと思います。主催者それぞれの個性が会そのものに表れていると考えると、その方の話し方の雰囲気が一番大きいと思います。個人的に嬉しいのが、女性のリピーターさんが多いことですね。安心できる場所、私がやっているなら安全、そう感じていただけているのは光栄なことだと思っています。

オンラインとリアルの違い

——オンラインをはじめてから私のように未経験の参加者は多いですか？

そうですね。オンラインで未経験の参加者が増えたという話は界限でもよく聞きますね。これを機に読書会を自分で開いてみた、という方もちらほらいらっしゃいます。実際に人を集めるとなると場所を確保するというのが手間なんですけど、オンラインなら、主催をするハードルも同時に低くなったのも事実かなと。

——緊張しすぎて一瞬聞くだけの参加にするか迷いました。

オンラインでも会場でも実際にそういう方はいますよ。この作品が好きで、自分は話すことはないけどみなさんの意見を聞きたいとか、カメラを付けずチャット機能だけでいいですか、とか。

——私はオンラインだから参加できた、というのはありますね…この時期にオンラインを始めたというのは、やはりウイルスの影響がきっかけとしてはあるのでしょうか。

その通りですね。ただ、なるべくなら申し込んでくれた人が全員集まって同じ空間で話せるというのはとても重要なことで、欠かしたくないんです。読書会に限らず、オンラインで何かを済ませる一番の欠点、楽しくない部分は空間性が自分の住んでる部屋だけになってしまうこと。なのでウイルスが蔓延するまでは全くオンラインをやることは考えていなかったです。

——なるほど。確かに実際に対生身の人間とひとつの空間に集まることでしか生まれないことってありますよね。

情報のやり取りだけが読書会の良いところではなくて、自分ができなかったことが残

るのも会場でやるメリットだったりするんですよ。あのとき発言を譲ってしまったから話せなかった、話したかったけど忘れてしまった、という経験って記憶に残るじゃないですか。そういう体験をしてもらうこともすごく重要で、それを含めひとつのイベントにしたくて。

ただ、これから集まれるようになってからもオンラインは定期的に続けていきたいとは思っています。みどりさんのように初めて来たという方や、なるべく素性を出さずにやりたい方も安心して参加できる場所でありたいという思いが、オンラインを始めてからは非常に強くなっています。

——読書会にまたぜひ参加したいと思いました！

そう思ってもらえたなら何よりです。

こういう場所、こういう体験を求めている人はまだまだいるだろうと確信しています。なのでみどりさんが体験したあの感覚を、もっともっと多くの人に経験して欲しいと思っています。

あなたも気になる読書会を見つけたら、ぜひ思い切って参加してみてほしい。
足を踏み出すと、止まっていた風景がゆらゆらと動き出し形を変えて広がっていく。